パンドラの選択

景山民夫

Baykal, Rossiya–Tokyo, Japan–Z
yarsk, Rossiya–Ulaanbaatar, Mo
ghol–Washington D.C., U.S.A.–Kh
barovsk, Rossiya–Atl
ta, GA, U.S.A.–Mosh

中公文庫

パンドラの選択（せんたく）

定価はカバーに表示してあります。

1998年3月3日印刷
1998年3月18日発行

著者　景山民夫（かげやまたみお）

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Tomoko Kageyama

本文印刷 大日本印刷　カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 大日本印刷
ISBN4-12-203086-2　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

パンドラの選択

景山民夫

中央公論社

パンドラの選択

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

プロローグ　地獄

地獄にも街がある。

私が見た地獄の街は、ちょうど東欧の小さな都市を思わせるような、どんよりと曇った重苦しい鉛色(なまりいろ)の空の下に細長くつづく、敷き石の道の両側に煉瓦(れんが)造りの家々が建ち並ぶ通りだった。

そこは、どうやら商店が軒をつらねている通りのようであり、それぞれの店から、真鍮(しんちゅう)のような金属で造られた看板が道路に向かって張り出していた。どの店からも、活気というものは感じられず、陰気な構えをしており、血みどろの動物の内臓のようなものを軒下にぶら下げてあったり、人を責め苛(さいな)むための拷問道具のようなものを店頭に並べたり、考えられるかぎり最低の猥褻(わいせつ)な性具をこれ見よがしにショウウィンドウに飾りたてたりして

いるのだけれど、呼び声も笑顔もそこにはなかった。それどころか、店内で亭主と妻が、あるいは店員と経営者が口汚く罵り合い、つかみ合いを演じているような店も、数多く見られた。

私は陰鬱たる気持ちで、その地獄の街並みを歩いていた。

と、一軒の商店のドアのガラスに、SOLDEというフランス語の文字が血の色の絵の具で書きなぐられているのが目に入ってきた。やらずぶったくりを信条としている地獄の商店で、安売りの表示を目にしたことにいささか驚きを覚えて、私は思わずその商店の中をのぞいてみた。

店の中では、痩せこけた五十がらみの白人の男が一人、なにやらブツブツと呟きながら、大小様々な商品を木箱に詰め込む作業に従事していた。男は古風なフロックコートを身にまとい、黒いボーラーハットをかぶっていたのだが、その縞模様のズボンの尻からは黒く細長い尻尾が床に向かって垂れていて、尻尾の先端の、床を擦っている部分が、ちょうどトランプのスペードの印のような形にふくらんでいるところから、一目でその正体が悪魔であることが判った。

私がドアを押すと、その上部に取り付けられていた鈴が、クランクランと陰湿な音を立てた。

男は、木箱に向かって屈み込んでいた姿勢から、体を捻じって、いぶかしげな表情で店の入り口に立っている私を見た。

「ここは、何を扱っている店なのかね」

私がそう尋ねると、男は手にしていた、錆びた鉄製のおぞましい偶像のようなものをポンと木箱の中に投げ込み、背筋を伸ばした。

「ちょっと遅かったな、もう売るものはないよ」というのが、男の返事だった。「この街もとんと不景気でね、うちはもう、店仕舞いをすることにしたんだ。商品も全部、もうすぐ問屋に返送する。その仕事をしてるところだ」

「どういう商品なのかね」

私は男のつっけんどんな態度に臆することなく、そうたたみかけて尋ねた。「私は物書きをしている人間でね、地獄のこういう店で一体なにを売っているのか、勉強のために教えてもらえるとありがたいのだが」

「ふん、どうやらあんたは、まだ肉体を持っている状態のようだな。なんで地獄に来たのかね、死んだ後の予行演習でもしてみたかったのかい」

男はそう言うと、自分の口にした冗談にさも満足したように、年格好に較べると異常なほど鮮やかな色をしている赤い唇を歪めて「ヒッヒッヒッ」と笑った。口元に狼のそれの

ような、黄ばんだ犬歯がのぞいた。
「通りがかりってやつさ。私の肉体はいま眠っている。つまり、こいつは私の夢の中の出来事として認識されているんだ。ちょっと特異な体質らしくてね、私は夢でこうやって幽界や霊界に旅してくることがちょくちょくある」
「ふん、前にも同じような人間に会ったことがあるな」と、男は先端が二叉に分かれた赤い舌で唇を舐めながら言った。「かれこれ三百年も前のことになるかな、あの男は、そう、確かエマニュエル・スウェーデンボルイとかいったな、この店をのぞいたことがある。あいつも、肉体を持っていながら、そこから遊離してこちらの世界をのぞきにきたと言っていた」
「その人のことは知っているよ」と私は答えた。「で、どういう商品なのか説明してくれないかね」
私が話を本筋に戻すと、男はちょっと肩をすくめてから、それでも説明してくれる気になったような様子を見せた。
「うちが扱っているのは、悪魔の道具ばかりさ。ここは地獄の中でも比較的あの世、まあ、あんた方の言い方ではこの世ってことになるんだろうが、そっちの世界に近い場所でね、ここで道具を仕入れた悪魔が、肉体を持っている連中にその道具で仕事をしに行くんだ。

こいつは……」と言って、男は木箱の横の黒ずんだ棚板にのっている灰赤色のブヨブヨとした軟体動物のような、不気味にうごめく肉塊のごときものを指差した。

「〝妬み〟だ。うちでは結構ヒット商品でね、まだお客がつくかもしれないから、箱に入れずに出してある。その隣の青みがかった方のが〝嫉み〟といって、まあ、似たような商品だが、こちらはご婦人層に人気がある。で、あっちにあるのは……」

男は別な棚の上の、楕円形をした、どす黒い鉄のような金属の塊を見上げて言った。金属からは、無数の細かい針のようなものが生えていて、一見したところでは、叢などでズボンや犬の毛などにからみつく草の実を大きくしたもののような印象を受けた。

「そいつは〝恨み〟だ。これもまあ、うちでは定番商品ってやつだ。こいつはオリジナルだから、まだ小さいが、ご使用時にはどんどん大きく育つから、うちの扱っているものの中でも比較的お買い得ってところだな」

「こいつは何だね？」

私は、自分のすぐ右手の棚、入り口に一番近いショウケースに置かれている、ちょっと、昔の鯨捕りが使っていた銛のような感じの、鋭利な先端を持つ金属製の道具に興味をひかれて、そう尋ねた。道具には入念に油が引かれていて、尖った先端は如何にも使い込まれたといった感じに、ピカピカと光を放っていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「そいつには触らないでくれ。それはまだ、お客の予約が入ってるんだ。最後の商売になるかもしれないがね、前金で払ってもらってるから、勝手に手を触れられると困る。その隣に置いてある四角い箱は〝利己主義〟ってやつなんだが、二つセットで売れたんだ」

「これが〝利己主義〟なのか」と、私は手提(てさげ)金庫のような箱をながめて呟いた。「それとセットということは、この銛みたいなものは何なんだね」

「うちの一番の目玉商品さ。何百万年も、いや、それよりずっと昔から地獄ではトップで売れてる。肉体を持ってる人間に射(う)ち込むと、一番効くぜ。こっちの世界に引っ張り込むためには、まあまずもっとも有効な道具っていえるだろうな」

「何というものなんだ?」

「それかい、それはな」と言って、男はまた赤い舌で嬉しそうに唇を舐めた。

「〝失望〟っていう道具さ」

男がそう答えたとき、壁にかかっている時計から歯の生えた鴉(からす)の人形が突然に飛び出すと「ギャーギャーギャー!……」と六回鳴いた。

「いかん、もうこんな時間だ、あんた、どうせ買う気はないんだろうから、さっさと帰ってくれ。早いとこ荷造りをして発送しないと、運搬屋が閉まっちまう。さあ、とっとと帰った帰った。買いものなら死んで地獄に堕(お)ちてから出直してきてもらおうか」

男はかぶっていたボーラーハットを手に取ると、まるで蠅(はえ)でも追い払うような仕草で、私に向かってその帽子を振り回した。帽子を脱いだ頭には、ベッタリとポマードのようなものでオールバックになでつけた髪の横から、ドーベルマンのそれを思わせる尖った耳が、ニョッキリと突き立っていた。私が仕方なく店を出たとき、それと入れ違いに、定かには見えなかったのだが、黒い旋風のようなものが私の横をすり抜けてドアの中へ入って行ったような気がした。それがあの〝失望〟と〝利己主義〟の注文主なのかもしれない、と思って、私はしばらくの間、通りの反対側の店の陰で様子をうかがっていたのだが、とうとう、その黒い旋風は店のドアからは姿を現わさなかった。おそらくは、裏口のようなものがあるのだろう。もう一度、店の表に立つと、もう店主の姿も見えず、そして、例の入り口に一番近い棚からは、銛のような道具と四角い箱の姿が消えていた。

私は踵(きびす)を返してその地獄の街を後にすることにした。どう考えても、そこはあまり長居をしたい場所ではなかったからである。

1

ロシア共和国バイカル地方

空はどこまでも青く広く晴れ渡っていた。

五月のバイカル地方には、心地良い風が吹く。つい一ヵ月ほど前まで雪におおわれていたこの土地に、突然に春が訪れ、花々が一斉に咲き乱れるようになると、あたりの景色は一変する。白樺を中心とした木々の梢(こずえ)が、あっという間に緑に染まり、植物の生命の力が大地に満ち満ちていく。

八田正義は、ステアリングホイールを握るランドクルーザーの窓を開け放って、その五月の風を顔に受けながら、運転をつづけていた。時折、バックミラーをのぞいて、後続のもう一台のランドクルーザーとの間が離れすぎないように、一定の車間距離を保つ努力を

する。一応は舗装がなされているとはいうものの、ほとんど手入れというものを施していない道路は、路肩部分が崩れかかっていて、うっかりそこに車重がかかると下手をすれば転覆してしまう可能性もあるから、慎重に走行コースを選ばねばならず、後続車の運転席に座ったＩＡＥＡ派遣員のダニエル・カーライルは相当に苦労してステアリングを操っているらしい。

「ダニエルが、えらいしかめ面で運転してるぜ」

またバックミラーをのぞいてから、八田が英語でそう告げると、助手席のスーザン・グッテンバーグがニヤリと笑った。

「私たち国連チームと違って、ＩＡＥＡの人たちは僻地に慣れていないから、フリーウェイ以外の運転は苦手なんでしょうね、出発前にはずいぶん自信があるようなことを言ってたけど」

「カンボジアやボスニアで運転したのに較べれば、こんな道路は僕には国連ビルの廊下みたいに感じるけどね」と八田が相槌を打った。

「まあ、あんまりいじめないで、適当なところで小休止したらどうかね。もうイルクーツクを出て百五十キロは走っているだろう」

後部座席から身を乗り出した物理学者のスースロフ博士が、年配者らしく八田にそう提

案した。

「たしかにその方がいいかもしれませんね」と答えて、スーザンが膝の上に広げた地図に視線を落とした。「目的地のザヤルスクまでは、あと約百キロ。ここら辺でひと休みしておいた方がいいかもしれないわ」

前方の大きな右カーブの手前に、木陰のあるゆったりとした草地が見えたので、八田は無線で後続車に小休止を告げ、道路を外れてその草地にランドクルーザーを乗り入れた。ドアを開いて車外に降り立つと、新緑の香りがいっそう強く八田の鼻に届いた。

「ひでえもんだな、ロシアの道路ってのは月のクレーターをお手本にして作ってるんじゃないのか」

白いボディに〝UN〟の文字を青いペイントで大書した二台目のランドクルーザーを、乱暴に草地に乗り入れてきたダニエル・カーライルは、エヴィアンのミネラルウォーターの瓶を手に車から降りてくると、開口一番、八田に向かってそう言った。

「こうと知ってたら、やっぱりヘリコプターをチャーターするんだった。まったく、胃袋が口から飛び出しそうになっちまった」

「これでもまだ舗装部分が残ってるだけ、ロシアの道路としてはましな方だと思うわ」と、スーザンがたしなめるような口調で応じた。「バイカル湖周辺は観光地だから、一応は舗

装してあるのよ」

「観光地だって？　ロシア人は一体何を観光しにあの湖に来るっていうんだろう。さっき通りすがりに見たかぎりじゃ、湖はひどい汚染状況だった」

ダニエルにつづいて二台目のランドクルーザーから降りてきたＩＡＥＡ派遣の物理学者である、エイブラハム・フォイが、中国語訛りの英語でそう言いながら頭を左右に振ってみせた。「一九八八年に、バイカル湖にしか生息していない種類のアザラシが大量死したのを覚えてるだろう。ほとんど絶滅の状態になった。あれから九年もたつのに、湖の環境は良くなるどころか、いっそう汚染が進んでいる。もしかすると、放射性廃棄物の水中投棄までやってるかもしれない」

「その可能性がないとは言い切れんな」と、スースロフ博士がフォイの意見に同調してみせた。

「ＩＡＥＡの方の調査項目に、バイカル湖の水質検査を加えてもらった方がいいかもしれん」

「環境調査は国連さんの担当になるんじゃないのかね」

ダニエルは、一リットル入りのエヴィアンを一気に半分まで飲み干してから、八田の顔を見てそう反論した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com